

検証・浦和電車区事件の真実 No.37

民主化闘争情報 [号外] 2008 年 7 月 30 日 発行 日本鉄道労働組合連合会 (JR連合)

第37回 山田の脅しでついに退職を決意！

带状疱疹に罹患して会社を休み、2001 年 6 月 27 日から再び出勤した Y 氏(当該事件被害者)は、「いずれ乗務させられるのか...」と思い悩み、精神的に追い詰められていた。そうした中、Y 氏に退職を決意させるできごとが起きた。

いい加減、身の振り方を考えろよ！

6 月末のある日の昼、Y 氏は業務用自転車のパンク修理をしている途中、浦和電車区 1 階の男子用トイレに入ると、奥の便器で山田被告が用をたしていた。Y 氏は仕方なく、一番手前の便器で小用をたすことにした。彼の顔を見るだけで緊張したが、「脅されませんように...」と念じ、できるだけ顔を合わせないようにしていた。しかし、山田が黙っているはずはなかった。

山田は Y 氏を睨みつけて、「おまえ、また乗務するのか。おまえが乗務すると、また組織が混乱するだろう、それくらいわからないの」「それに、おまえは病気にまでなったんだろう。いい加減、身の振り方をもっと真剣に考えろよ」などと Y 氏を責め、トイレから出て行った。Y 氏は、我慢してじっと聞いていた。

短時間の脅しだったが、これがきっかけで、精神的に極限状態にあった Y 氏の緊張の糸が切れた。何とかして JR 東日本に残るために、JR 東労組や会社の言うことに従い、いくら脅されても我慢してきた Y 氏であったが、「もうダメだ、もう辛抱できない...」と観念した。

会社に転勤を訴えても「わがままだ、我慢しろ」と言われ、いずれ乗務をさせられることは避けらなくなっていた。組合からは、大淵や山田が「乗務しろ！」「乗務したら混乱するだろ！」「おまえがいること自体が頭にくる！」「いい加減、身の振り方を考えろ！」と繰り返し恫喝され、運転しようとしまいと、会社を辞めない限り、脅され続けることは明白だった。

Y 氏は、自分を脅し続ける東労組を基軸としている JR 東日本に残ることは不可能であることを悟った。この会社に、自分を守ってくれる味方はいないのかと嘆いた。「もう会社を辞める以外にどうすることもできない...」と思い、唇をかんだ。悔しくて仕方がなかった。

両親に「会社を辞める」と打ち明ける

その日の仕事が終わって自宅に帰った Y 氏は、両親に、「会社を辞める」と打ち明けた。Y 氏の両親は、なぜ息子がそれほどまで酷く東労組からいじめられなければならないのか、納得できない様子だった。子供の頃から鉄道が好きで、運転士になって喜んでいて Y 氏を見ている両親は、退職には強く反対した。しかし、Y 氏の意志は固かった。このままでは運転中に事故を起こしかねず、不安で、とても乗客を乗せた電車を運転する自信がないことを繰り返し伝えた。何時間も話し合っ、ようやく、自分の考え方を理解してもらった。それでも Y 氏の両親は納得できない様子だった。

そして決意を固めた Y 氏は、7 月 13 日、浦和電車区 I 区長に退職を申し出た。(次号に続く)